

新米漁師の奮闘記 ～漁師の息子が漁師になって～

岩井富浦漁業協同組合
川崎 諒

1. 地域の概要

私の住んでいる南房総市は房総半島南端に位置し、西側には東京湾、東側と南側には太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は南房総国定公園に指定されている(図1)。気候は沖合を流れる黒潮の影響により、冬暖かく、夏涼しい海洋性の温暖な気候であり、その環境を利用した漁業、農業、酪農が盛んで、私の生まれ育った岩井地区は、冬から春にかけてはピワやミカンなどの果実や花、夏には海水浴に訪れる観光客でにぎわい、民宿も多く営まれている。



図1 千葉県南房総市
岩井地区の位置

2. 漁業の概要

私の所属する岩井富浦漁業協同組合(以下、「岩井富浦漁協」という。)は、平成27年1月に岩井漁協と富浦町漁協が合併し発足した。正組合員229人、准組合員323人で構成されている。定置網、一本釣り、刺網、あまなどの沿岸漁業のほか、沖合漁業のさば・さんま棒受網も営まれており、平成28年の水揚量は1,937トン、水揚金額は4億8,000円である。

また館山自動車道が平成19年7月に全線開通したことで都市部からのアクセスが良くなり、漁協では訪れる観光客をターゲットにした漁協直営食堂「網納屋」と「おさかな倶楽部」、直売所の「大漁市場」での直販事業や観光定置網や地曳網などの観光関連事業にも力を入れている。

3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私の実家は祖父の代から岩井地区で漁業を営んでおり、父は、あま、刺網、曳縄、見突き、たこかご、海藻類養殖、ばいかごなどさまざまな漁業で生計を立てている。また、父は漁業体験の交流や資源管理に関する取組等も積極的に行っている。そんな環境の中、私は小さいころから海や魚に興味があり、休日には海に潜ったり、父の船で釣りをしたりしていた。私は特に釣りが好きで、釣り具メーカー主催のルアーや餌釣り大会に頻繁に出場しては、その多くで優勝するほどの腕前であった(図2)。

進路について、両親は漁師になることを勧めず、収入の



図2 過去の釣り大会の
優勝トロフィー

安定した民間企業に就職することを望んでいた。そのため、高校は商業科に進学し、卒業後は大手造船会社に就職した。仕事内容は海のことに直接関わらない事務職であり、1年半働くうちにだんだんと海や漁業への思いが募っていった。そして、漁師になることを決意し実家に帰った。父と同じ船に乗り、手伝いをするという選択もあったが、自分で魚を獲りたいとの思いが強かったので、自分一人で頑張ることを決めた。

4. 研究・実践活動状況及び成果

(1) 新米漁師の奮闘

岩井地区では、定置網以外にブリやスズキ、マアジなどの活魚を水揚げする人は少なく、比較的活魚の値段が高い(表1)。そのため、活魚をメインに水揚げすれば水揚額も上がるのではないかと考えた。そこで、季節や来遊する魚に合わせてさまざまな漁業をする父の操業スタイル

表1 岩井支所における鮮魚と活魚の単価例
(平成23~24年の平均値)

魚種名	鮮魚単価(円/kg)	活魚単価(円/kg)
ブリ	275	485
カンパチ	549	1,074
スズキ	292	763
アオリイカ	913	1,536
コチ	542	1,812
ヒラメ	744	1,352
マアジ	558	※マアジの活魚の扱いは数件

ルを参考にしながら、腕に自信のある釣り漁業を主体に、他の漁業を組み合わせた操業スケジュールを考え(図3)、平成27年11月に実家に帰り、来年からの本格的な着業を見据え、父の所有する1.5トン型の船外機船を借りて、次の取組を試みた。

漁法	漁獲対象	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ルアー釣り	ブリ・カンパチ			←									→
	スズキ			←									→
	アカハタ・カサゴ									←			→
ビシ釣り	マアジ	←						→					
餌木釣り	アオリイカ					←	→				←	→	
はえ縄	コチ			←				→					
	ヒラメ	←				→							
海士	アワビ								←	→			
	サザエ								←	→			
	イセエビ								←	→			
採藻	ハバノリ	←	→									←	

図3 複数漁業を組み合わせた操業スケジュール

①ルアー釣り

まずは腕に自信のあったルアー釣りで、青物(ブリ、カンパチ)を活魚で水揚げすることを考えた。しかし、漁場やルアーの選択がうまくいかず、思った水揚量が得られなかった。そこで、岩井はもちろん周辺地区の漁業者から漁況の情報を集め、漁場を探し、漁獲した魚に吐かせた餌を参考にルアーの選択(図4)をしたところ、青物やスズキの水揚量が増えた。青物の獲れない時期にはアカハタやカサゴも漁獲した。

漁獲物の単価は活魚と鮮魚で大きく異なるので、漁獲したすべての魚種を活魚で水揚げするために、魚体にキズをつけないよう、結び目がないゴム製のネットを導入し（図5）、針をはずす際も魚体に触れないよう特殊な治具を用いた（図6）。そのため魚の状態は非常によく、初夏の旬の時期のスズキは5,000円/kg近い金額で扱われたこともあった。しかし、ルアーだけでは思った水揚げができない時期も多かった。



図4 魚に吐かせた餌（上）に合わせたルアー（下）



図5 魚を傷つけないラバーネット



図6 魚に触れずに針をはずす治具

②ビシ釣り

次に、岩井地区では活魚としての扱いの少ないマアジを、天秤にコマセかごと仕掛けを付けたビシ釣りで狙った（図7）。しかし、カワハギやフグなどの餌取りが先に集まり、マアジを思うように漁獲できなかった。試行錯誤の末、コマセを市販のアミエビから、岩井の定置網で漁獲された新鮮ないわしを用い、頭部は包丁で“たたき”に、身と骨は軽くすり潰したものを混ぜ合わせた“特製いわしミンチ”に変えたところ、餌取りが減り、マアジを2倍近く効率的に漁獲できるようになった。



図7 ビシ釣りの仕掛け

③餌木釣り

岩井地区ではアオリイカを専門に狙う漁師は少ない中で、餌木を使ってアオリイカも漁獲した。アオリイカは、釣れる時期は限られるが、単価がよく、特に、他の漁獲物が少ない晩秋には貴重な収入となるが、キズが付きやすく、傷付くと単価が大きく下がるので、ゴム製のネットで特に丁寧に扱った。

餌木を使ったアオリイカ釣りは昔から得意で、地元を離れて近隣の地区でもたくさん釣っていたので、他地区の漁師にもうらやましがられるほどであった。そのことが縁で他地区の漁師とも情報交換をする仲になり、今も連絡を取り合っている。

④はえ縄

さらに、岩井地区ではあまり行われていないはえ縄で、活魚単価の高いコチやヒラメを狙うことにした。コチやヒラメはルアーでも漁獲できるが、はえ縄は針数も多く効率が良いため、活餌が入手しやすい時期（1～7月）に行った。何度も試行錯誤しながら、枝糸の長さは活餌の動きがよくなる2mが最適と分かった。また、使用する針も検討し、針の軸に対して針先の角度が緩い方（図8、左側）が、餌付けの手返しが早いことが分かった。

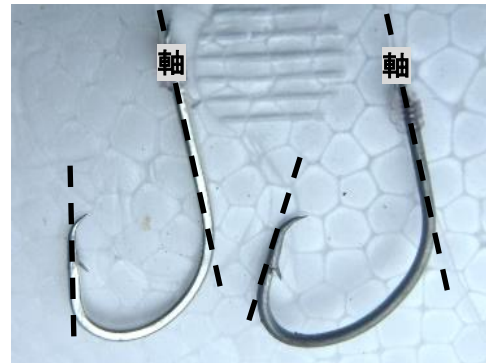


図8 はえ縄の針（左）

⑤その他

魚が獲れない時期である冬季には、よい磯を探して海岸を歩き回り、ハバノリを採取し、また、平成29年からは、本格的にあま漁業にも挑戦し、アワビ、サザエ、イセエビも漁獲している。

（2）“育てて増やす”意識

さまざまな漁業を実践する中で、あま漁業にも参入したが、小さい頃潜っていた磯根と比べ明らかに藻場が消失していた。あまの先輩たちに話を聞くと、ここ数年で急激に藻場が消失しており、平成27年から、水産総合研究センター、館山水産事務所（以下、「水総研」、「水産事務所」という。）と協力して藻場の調査と回復の取組を行っていることを知った。これまでの調査で、消失の原因の一つは、ガンガゼやアイゴなどによる食害であることが分かってきた。そこで、平成29年から私も、磯根の資源を維持、回復するために、先輩たちと一緒にアワビの種苗放流や藻場回復の取組に参加している。

①種苗放流と藻場回復の取組

今年から、水総研、水産事務所と協力し、アワビ種苗の放流にも参加している（図9）。藻場の消失は著しいが、その中でも海藻の繁茂している場所を選び、稚貝を放流した。今後は、年に数回、稚貝の測定、藻場状況の変化を調査し、成長・生残を追跡していく計画である。



図9 試験放流するアワビ種苗

また、藻場消失の原因の一つであるガンガゼの駆除について、これまで私は、船の操船を行う「舵子（かじこ）」として協力していたが、今度は先輩たちと一緒に潜り、実際に駆除を行うこととしている。

そして、冬季には、アラメやカジメの幼体をロープやブロックに付けて、周辺漁場に移植する取組も実施する。アラメやカジメが増えれば、アワビがたくさんいた海に戻ってくれるだろう。

②アオリイカの産卵礁の設置

岩井地区の先輩たちは、アオリイカ資源の増大と、アイゴなどの海藻を食べる魚類から藻場を守るために、水総研や水産事務所と協力して、平成 28 年からアオリイカの産卵礁を漁場に投入しており（図 1 0）、私も平成 29 年からこの取組に参加した。先輩たちは定置網のそばに、私はアオリイカがよく釣れる場所に設置した。設置 1 カ月後に状況を確認したところ、先輩たちの産卵礁にはたくさんの卵が産み付けられたが、私の投入した産卵礁には卵を産んでくれなかった（図 1 1）。来年は、今年の結果を踏まえて、先輩たちとよく相談して投入する場所を決めようと思った。



図 1 0 アオリイカ産卵礁設置の様子

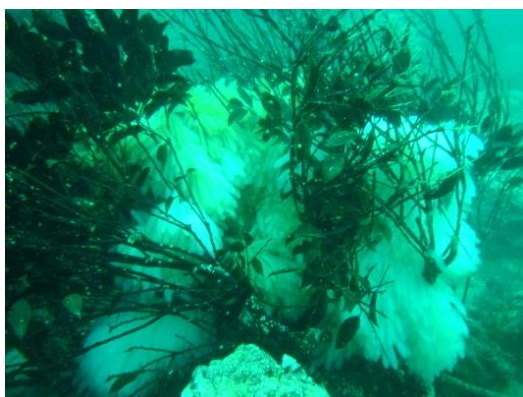


図 1 1 アオリイカの卵が産み付けられた先輩たちの産卵礁（左）と私の投入した産卵礁（右）

5. 波及効果

これまで岩井地区では、丁寧に扱われた活魚は少なかった。ルアー釣り、ビシ釣り等で活魚の水揚げを積極的に増やした結果、漁獲の多い月の私の水揚げ量は、ブリは 1,500 kg 以上、スズキは 600 kg 以上となった（図 1 2）。また、大型定置網を含む岩井地区全体の活魚水揚げに対する私の水揚げ割合は、スズキでは 35%、マアジでは 45%、アオリイカでは 50%、カサゴでは 76%、アカハタでは 100% 近くを占め（図 1 3）、これまで活魚の水揚げが少なかった岩井地区に貢献できたのではないかと考えている。

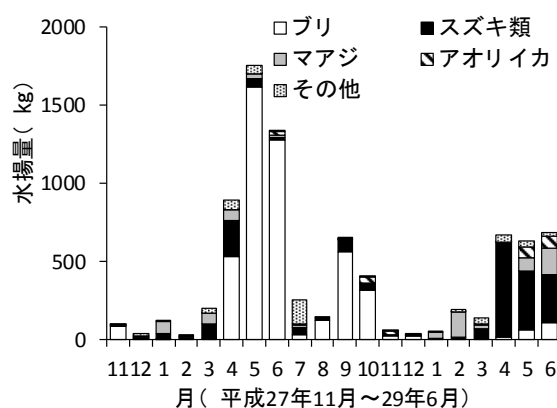


図 1 2 釣り漁業による水揚げ量
(主にルアー釣りによる)

また、さまざまな魚種を活魚で漁獲できるため、民宿や居酒屋、寿司屋からは、魚

種を指定した漁獲の依頼が増え、地元だけでなく近隣地区での取扱いも増えてきており、買受人からも評価されつつある。

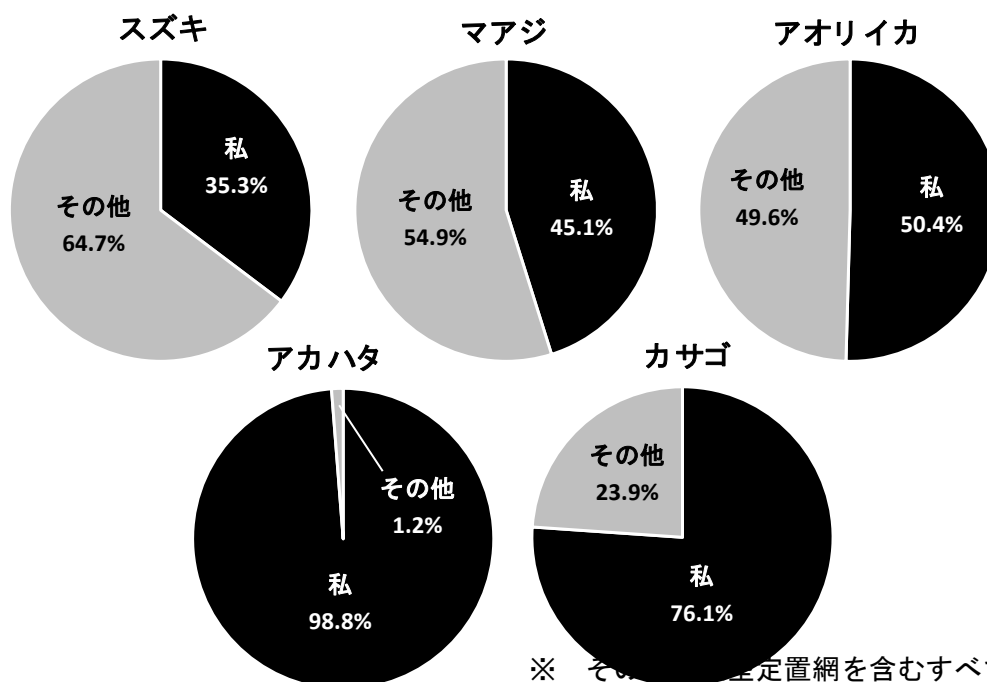


図 1 3 岩井地区全体の活魚水揚量に占める私の水揚割合 (2017 年 6 月～9 月)

アオリイカの産卵礁の設置については、近隣の漁協の 2 つの漁業者グループが興味を持ち、平成 29 年春から設置が行われた。さらに他の地域でも要望があるようで、今後、その取り組みが波及しアオリイカがたくさん育つことを望んでいる。

また、県内で漁師自身がガンガゼの駆除の取組を始めたのは岩井地区が初めてであり、現在は隣の地区でも検討されている。藻場回復への漁師の関心は高く、あま漁業に若手が新しく加わったことで、これらの藻場回復の取組が加速すると考えている。

6. 今後の課題や計画と問題点

(1) 営漁計画

今後について、これまでの操業スケジュールでは、どうしても秋から冬にかけて対象魚種が少なくなり水揚げが減少する問題を抱えている。そこで、新しい対象魚種やさまざまな釣りにチャレンジできるよう、父から借りている漁船よりも大きい船を造ることを決意し、現在、釣り漁業を中心とする私の漁業スタイルに合わせた 5 トン未満の小型漁船を



建造中である (図 1 4)。平成 30 年 1 月には完成予定である新船は、キンメダイやタチウオ釣り、カツオの曳縄やアマダイの延縄を始めることで収入の安定化を図

りたいと思う（図15）。

漁法		対象魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
これまでの 操業	ルアー釣り	ブリ			←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
		スズキ			←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
		アカハタ・カサゴ										←	←	←	
	ピン釣り	マアジ	←	←	←	←	←	←	←						
	餌木釣り	アオリイカ					←	←					←	←	
		コチ			←	←	←	←							
	はえ縄	ヒラメ	←	←	←	←	←								
		海士	アワビ								←	←			
			サザエ								←	←			
	イセエビ									←	←				
採藻	ハバノリ	←	←										←		
新たな 操業	釣り	キンメダイ	←	←							←	←	←	←	
		タチウオ	←	←							←	←	←	←	
	曳縄	カツオ					←	←	←	←					
	はえ縄	アマダイ	←	←							←	←	←	←	

図15 水揚の少ない時期を補った新たな操業スケジュール

(2) 磯根資源

一人前の漁師として安定的な収入を得るためには、資源変動や来遊の有無に左右されづらい、地先の資源を増やし利用する取組も重要と考えている。そのためには、磯根を守り、資源を増やすアオリイカの産卵礁の設置に加え、藻場の食害生物であるウニ類を除去し、食用となるムラサキウニなどは実入りを良くするための肥育の取組に挑戦したり、磯根漁業で安定した漁獲を確保するため、藻場回復に向けた取組に力を入れていこうと思っている。

(3) 最後に

岩井地区の大型定置網には、私と同じように海や漁業が好きな若い人が数年前から着業し始めている。彼らは定置網の従業員ではあるが、定置網の休日には定年後も岩井で漁師を続けていけるよう、今から小型船漁業への着業準備として、船の購入や漁場の下見、技術習得のために海に出ている。その姿勢と熱意が認められて昨年、正組合員になった人もいる。このようなやる気のある若い漁師たちと一緒に、岩井地区の漁業を引っ張っていききたい。

まずは、私が行ってきた魚の扱いを丁寧にする活魚の取組を周囲の人たちに知ってもらい、若い人を中心に「今までのままでいい」という意識を少しでも変えて、岩井地区の漁業、ひいては漁村の活性化につながられるよう、切磋琢磨しながら頑張っていきたい。

私は釣りが大好きなので、これからも活魚水揚げにこだわって、釣りのナンバー1を目指していく。